

展 望

学校におけるいじめ

鈴木 康 平

(熊本大学教育学部)

BULLYING IN SCHOOLS

Kouhei SUZUKI

A number of investigations of school bullying in Japan were reviewed and it was found that around 1985, many cases of bullying in this country were reported in the mass media and many psychologists and educators in schools gave considerable attention to these phenomena. In previous years psychologists did not pay much attention to bullying in schools as the cases were not so severe, and were not regarded as unusual behavior for children. The focuses of many psychologists in their investigations of bullying were as follows: causes of bullying, structure of the class where bullying occurred, characteristics of bullies and victims, relationship between attitudes toward bullying and those toward other aspects of daily life, values of living, and so on. Some of these investigations suggested that the bully-victim problems arise and become serious not only because of the simple relations between two pupils, i.e., bully-victim relations but because of more complicated relations surrounding the situation, i.e., audience, onlookers, go-between, and so on. Having reviewed many articles, we realize that it is very important to build strong linkages among investigators, teachers and parents, including members of the community, if these social evils are to be eradicated.

Key words: bullying, bully-victim relations, classroom structure, linkages.

学校におけるいじめの研究を展望するにあたり、まず教育心理学の分野での、いじめの認識の変遷から概観していく。以下に掲げるいくつかの見出しはそこで紹介する研究の全貌・特質を網羅しえないことを予めお断りしておく。研究対象の性質上、多くの研究がいじめの原因、心理、分類、対策等に多かれ少なかれ触れているからである（なお、旧来のいじめと最近の深刻ないじめを区分するため後者を「いじめ」と記す研究者もいる。その意図は十分理解できるが、ここでは引用論文のままとし、一般には括弧なしでいじめと書く）。

1. いじめの認識の移り変わり

戦後間もなく1950年に出版された依田新編「教育心理学」の中で、牛島義友は、学童期の交友関係について「これらの遊び仲間、子供の社会は必ずしもデモクラティックではない。ここで支配しているのは力の原理である。…子供の社会は、…非常に緊張した社会であり、子供た

ちはこの中で激しい錬成を受けている…」と説き、転校生が小さくなっている例を挙げているが、いじめの言葉は用いていない。

その5年後、日本教育心理学会草創期の1955年「教育心理学研究」第2巻に依田新・大橋正夫・島田四郎は「学級構造の研究—入学時より三年間の友人関係の調査」の題目で、sociometric testにより学級構造の変化を追跡調査した。当時は拒否的選択も実施しており「多数から集中的に選ばれるスターは、『好きな友達』ではほとんどが女子、『嫌いな友達』ではほとんどが男子である。両方ともその地位はかなり安定しているが、特に前者はそれが顕著である」と述べ、いわゆる「被排斥児」と呼ばれる子どもの存在を指摘しているが、ここでもいじめの文字はみられない。同じく1955年、「教育心理学研究」の第3巻において、田中熊次郎は「学級社会における『社会的共感性』の発達と変容—教育心理学におけるソシオメトリ—発展の方法—」と題した論文の中で「…『ふざける、下品である、真面目でない、うるさい、生意気であ

る、いじめる』といった理由で、男児からも女児からも嫌われていたが…」と嫌われた理由にほんの1箇所だけに「いじめる」を挙げている。小川一夫も同誌の同じ巻の4号と次の4巻1号に(いずれも1956年)「学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究—第一報告—」及び「—第二報告—」を載せ、小学校15学級、児童674名を対象に sociometric test を実施、人気者、被排斥児、孤立児を抽出している。教師は人気者については児童の見方と合致しているが、被排斥児、孤立児になると見落としや見誤りが大きいこと等を指摘している。そこでの排斥理由に児童は「悪口、あだ名をいう、なぐる、いばる」を挙げ、いじめの文字は見当たらず、教師は「大声で騒ぎ、弱い者をいじめる。…」と1箇所にのみ「いじめる」を挙げる。今から40年前には、児童・生徒の交友関係の深刻な問題点として「いじめ」が重大な要因としては存在していなかった(それどころか小項目をも成さなかった)ことを物語る好個の資料である。事情はそれから10年経った1966年に発行された文部省の編になる「生徒指導の実践上の諸問題とその説明」についても同様で、教師に対する注意喚起の事柄のどこにも「いじめ」は独立した項として示されていない。さらに12年を経て昭和54—58年にかけて、河井芳文ら(1985)が小学校1—6年生62学級2,420名に対して行った sociometric test の選択—排斥の実態とその理由の研究でも、得られた排斥理由総数は「席替え場面」で5,806件、「遊び場面」で4,147件であったが、理由の「中分類：直接攻撃」の中の「小分類 No.3：いじわるをする、いじめる、…いびる」ので「席替え」して欲しい627件(10.8%),「遊びたくない」368件(8.9%),「小分類 No.4：(他の子を)いじめる、いたずらする、弱い者いじめ、喧嘩する」ので、「席替え」して欲しい61件(1.1%),「遊びたくない」59件(1.4%)が相当したと記述され、「いじめ」は中項目どころか小項目のひとつの独立項目ですらない。論文発表の時期こそ1984年であるが、前述の通り1978—1983年にかけての調査実施であったことに注目したい(排斥理由の明記可能という時代背景も合わせて)。

いじめに関する単行本としては富田武忠編になる「いじめられっ子」が1980年に出版され、1983年、毎日新聞社教育取材班が「“いじめ”の構造」を出版、子どもの非行とのかかわりで論じ始めた。そして、いじめによると思われる犠牲者が出るに及んで、事態を重視した文部省が1984年小学校生徒指導資料3「児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題」で「いじめ」を重要事項として取り上げた。そこにおいては、手段・方法による分類(言葉での脅し、冷やかし・からかい、持ち物を隠す、仲間はずれ、集団による無視、暴力を振るう、たかり、お節介・親切の押し付け、その

他)、構成人数による分類(単独、数名、大勢による)、動機による分類(怒りや憎しみから、うっ憤ばらし、性格的な偏りから、関心を引くため、隠された楽しみ、仲間に取り入れるため、異和感から、その他)を提言し、「そのほかにも、1種のゲームのように順にいじめの対象を変えていくとか、服従させようとしていじめる、親愛の情を示すためにいじめるなど、様々な場合がある。」と注意を促した。

そして、1985年4月19日付け朝刊(朝日新聞)に「いじめで7人が自殺、仕返し殺人・放火も—警察庁まとめ、531件、1920人を補導—昨年全国の小・中・高校」の見出しが第1面に載った。「国会で『いじめの問題』が論議されたことなどを受け、同庁が昨年の刑法犯事件を洗い直して初めてまとめた」ものと報ぜられたのである。これを契機に、いじめの問題が世間の耳目を集めるところとなり、様々な論が展開され、学校では教師がその対応に迫られる現象が顕在化し、「時流」の勢いを感じさせた。いじめは現代病の典型とまで言われるに至り、多くのいじめ論が出された。いじめの報道も多くなされたが、その実数を挙げるのはこの稿の本来の趣旨ではないので詳細は省略する。参考までに文部省による統計数値をみると1985年度(昭和60年度)公立小学校総数24,796校、いじめ発生学校12,968、発生率52.3%、発生件数96,457件、以下数字は同順の事項で、公立中学校10,346校、7,113校68.8%、52,891件、公立高等学校4,273校、1,818校、42.5%、5,718件という数字が並んでいる(総発生件数155,066)。ちなみに、この時の文部省調査での「いじめ」の定義は「①自分より弱いものに対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実(関係児童生徒、いじめの内容等)を確認しているもの」(昭和60年度は昭和60年4月1日—10月31日までの数である：文部省初等中等教育局中学校課)であった。その後4、5年の内に文部省への「報告件数」は急激に減少し、新聞報道も少なくなっていた(平成5年度小・中・高校合わせて21,598件。文部省まとめ：毎日新聞平成6年12月9日報道)。しかし、平成6年にいじめによると見られる自殺が5月に1件、7月に2件発生したとの新聞報道がなされ、さらに11月27日に中学2年生が自殺し、残された遺書で執拗ないじめの存在が示され、改めて世の人々の強い関心を喚起した。

2. いじめの質的変貌

「いじめる、いじめられるという問題は、今日特に始まったものではない。昔から子どもの世界にいじめはあった。しかし…」(詫摩武俊1984)。「より強い者がより弱い者に苦痛を与えるということがいじめだとすれば、おそらくそのような現象は人類が集団生活をはじめたとき

からあったと思われますし、私どもも子どもの時代にはいじめたり、いじめられたりして、その中で人間社会における生き方をトレーニングされてきたというところもあると思うのです。しかし…」(野崎幸雄1985)。「…ごく最近まではこうした些細ないじめはたかが子どものイタズラや、少々度の過ぎたふざけでしかないと考えられていた。ところが…」(森田洋司・清水賢二1986)。ここに引用した文章は、それぞれの著者の言わんとするところの前語りのような部分である。これらの後に続くところが、論旨の骨子をなす。著者の方々に失礼を顧みず敢えて文章を中断して引用させていただいたのは、現今のいじめの問題が、この点を避けて通れないところにあると痛感しているからである。上記の方々の文章の引用を続ける。詫摩は「…しかし今日のいじめ、いじめられの実例を見ると、親たちが昔経験したいじめより、はるかに問題が深刻になっていると考えられる。陰湿、執拗、長期化、これが今日のいじめに見られる特徴である。…」と論じ、野崎も「…しかし、今私どもが人権擁護の立場から問題にしているいじめというのは、そういう一般的ないじめではなくて、非常に陰湿で、徹底的で、…集団的な力を借りたり、あるいは非常にサディスティックな方法で、より弱い立場にある人に対し社会的、常識的にみてとうてい限界を越えてしまっていると思われる苦痛を与えているものをつかまえて、『いじめ』と定義づけているのです。私どもは、このようないじめは人権侵犯だと考え、人権擁護の立場から何とかしなければいけないと考えているわけです。」と語る。森田・清水は上記の文章に続けて「…些細なことと考えられていたいじめが死につながる事件にまで発展し、底辺では校内暴力や犯罪・非行行動と接していることが認識されるにいたり、もはや『たかが子どものこと』とはいえなくなってきた。」と述べる(森田らは1994年この新訂版を出したが論旨は初版と一貫している)。また、小林剛(1985)も、昔からあったいじめと最近のいじめの違いを次のように指摘する。即ち①陰湿化、②長期化、③いじめ行為の正当化、④偽装、⑤巧妙化である。松本良夫(1986)は「…この十数年間に、『密室型』問題行動ともいうべき、『四内暴力』が全て出揃った。(1)親に向けられた家庭内暴力、(2)教師・学校に向けられた狭義の校内暴力、(3)従来は生徒間暴力として校内暴力に含められていた仲間内暴力としての『いじめ』、そして、(4)自分自身に向けられる「自己内暴力」(登校拒否、思春期やせ症、極度の内閉的傾向、自殺など)である。以上の四内暴力のなかで、最後に登場したのが『いじめ』問題である。…」と社会学者の立場からいじめを位置づけ、「いじめ」の成層構造を次のように提言する。第Ⅰ層は刑事事件や自殺事件につながった深刻な「いじめ」、第Ⅱ層は

そこまでいかなくても、学校が公的に認知した「いじめ」、第Ⅲ層は「いじめ、いじめられ」経験の調査に、生徒が告白したレベル、第Ⅳ層は「いやみを言われた」といった程度の比較的軽微なものまで含めた部分である。生徒一万人あたりの発生推定数(その層までの累積)を第Ⅰ層から順に4, 100, 4,000, 7,500としている。

蜂屋良彦(1986)は「いじめ」深刻化の原因にいじめの生起に深く関わる「他者との下方比較過程」による攻撃行動を強く助長する社会的条件の出現(慢性的欲求不満状態、耐性欠如、他者の痛みへの無関心)と社会的コントロール・システムの減少(すなわちいじめを抑制する機能の喪失)がいじめの深刻化をもたらすと考える。要因ひとつとは些細に見えても複合汚染の深刻な結果が重大ないじめにつながると指摘した上で、「このように考えると、いじめは昔から存在していたのだなどと呑気に放置しておける問題ではないのである」と論ずる。

これらの見解は1980年代後半以降のいじめに質的変貌があることを示唆している。

本稿では、我国の学校のいじめに焦点を合わせるが、外国の事情も垣間見てみる。ちなみにイギリスではSmith, P.K.ら(1994)が、「school bullyingの研究は最近まで殆ど体系的に行われていなくて、1897年Burkによる“Teasing and bullying”と題する論文が出されて以来ずっと空白のままであった。1970年代に入り、Lowenstein(1978a, b)の論文がやっと表われたにすぎない。そして1980年代に入ってもまだ主要な研究事項ではなかった。…racist bullyingは深刻なもので子どもの死がもたらされることもあった」と述べる。ノルウェーのOlweus, D.(1993)も「学校の子どもたちの間のbullyingは紛れもなく非常に古くからある現象である。…“bully/victim problem”は多くの人が極めて身近かな問題と知っていながら、それに体系的に取り組もうとする姿勢は極く最近1970年代初期に至るまで殆ど無きに等しいものであった。」と言う(ノルウェーではOlweus等が関与した国家規模のいじめ長期対策が、イギリスではSmith等を中心にThe DEF Sheffield Anti-Bullying Projectが1991年から3年間ほど続けられ、それぞれの成果が報告されている)。

3. いじめの定義といじめの発生の機序

まず、日常用語としてのいじめから見てみよう。手元の辞書類、例えば1981年(昭和56年)刊行の国語大辞典(小学館)、新国語辞典(角川書店)や1983年(昭和58年)刊行の広辞苑第三版(岩波書店)には「いじめ」という名詞の項目はない。それぞれに「いじめる」の動詞項目は載っている(ちなみに広辞苑では「いじめる」を「弱いものを苦しめる」とだけある)。ところが同じ広辞苑の第四版(1991年、平成3

年刊)には「いじめ(苛め)」が名詞の見出しで載っている。そして「いじめ」とは「いじめること。特に学校で、弱い立場の生徒を肉体的または精神的に痛めつけること」と説いてある。前述した世の流れを反映している。文部省では、生徒指導資料集17(昭和57年)で、「生徒間暴力」という呼称を用いているが、前出の初等中等教育局による「生徒指導上の諸問題と文部省の施策について(平成3年)」では「この調査ではいじめを「①自分より弱いものに対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実(関係児童生徒、いじめの内容等)を確認しているもの」として件数を把握したと述べ、行政の観点からのいじめの定義をしている。

宮原広司(1983)は現代のいじめの本質について「自己の周りにある均質な集団的雰囲気と同化しないもの、同化できないものへの差別・嫌悪・無関心の表現であり、均質集団から自分一人が脱落することへの恐怖感の表現でもある。つまり、自立した個人として生きることのできない弱さ、個性的個人として、集団に立ち向かえない弱さを基礎としている。…彼らが弱い者を攻撃するのは一見攻撃的に見えながら、現実に対する絶望と逃避の表現、自虐的行為にすぎないのである。」と言う。

遠藤辰雄(1985)は「いじめとは『弱い者などを、苦しめたり悩ませたりすること(日本国語大辞典)』であり、具体的には、『特定の相手に肉体的攻撃、または言葉による脅しやいやがらせ、仲間はずれ、無視などの心理的圧迫を繰り返し加えて苦痛を与えること』(警察庁)である。従って『いじめ』の程度は、『いじめっ子』の側にしても、『いじめられっ子』の側にしても全く主観的である。しかし、被暴力の側の屈服の兆候、例えば苦痛の表現あるいは反抗や時には冷静ささえ強化因子となって、いじめ独特の冷酷さと執拗さをおびた残忍さのエスカレートを見、時には『いじめ殺し』の起こることさえある。」と分析・警告する。

ちなみに Olweus(1993)は「一人の児童(生徒)が繰り返し長期に亘り他の一人或いは複数の児童生徒達によるいやな行為にさらされる時、いじめられているとする」と考え、SharpとSmith(1994)は「いじめは相手を故意に痛めつけようとする攻撃行動で、しばしばしつこく何週も何か月も何年にもわたる。そしていじめられている方は自己防衛ができない。いじめの底に流れているのは勢力の濫用と、脅しと優位に立ちたい心の表われである」と考える。

筆者は、日本社会心理学会熊本シンポジウム、日本社会心理学会第26回大会東京大学シンポジウム、日本心理学会第50回大会名古屋大学シンポジウムにおいてそれぞ

れ司会者あるいは話題提供者として考察を加えたり、小・中・高校・大学生・現職教師たちに対しての調査研究を行ううち、次のような定義を抱くに至った。「いじめとは、ある特定の一人に、他の一人ないしは複数の者が繰り返し、あるいは、よってたかつて、精神的、身体的苦痛を与え続ける比較的長期にわたる屈曲した攻撃行動(黙殺、無視を含む)を伴った、精神的または身体的圧迫である」。

いじめの生起の原因について古畑和孝(1985)は、いじめを攻撃・暴力の一形態とみなし、フラストレーションの観点から Dollard, J.や Berkowitz, L.の理論や Bandura, A.らの観察学習の理論の吟味を土台として、競争的体制が顕著な現在の学校教育においては、挫折感・失敗感や屈辱を味わう子どもが出易いことを指摘、いじめっ子が全てこの範疇にはいる子であるとは言わないが、見過ごしてはならぬ点が潜んでいると警告する。ただし、古畑(1986)はそれだからと言って、いじめることを正当化することにはならないし、してはならないと注意を促している。

4. 学級構造からみたいじめ

森田洋司(1985)は、「学級集団における『いじめ』の構造」の論文において清永賢二や松浦善満とともに昭和59年に東京・大阪の小6・中2の44学級1,718名を対象にして調査を実施した。それによると、いじめた経験が小6で53.1%、中2で44.3%、いじめられた経験が、それぞれ62.1%、44.0%であり、いじめへの評価として(全対象者)「少しぐらいあったほうがよい」(6.4%)、「ふざけ半分だからたいしたことではない」(15.1%)、「理由によっては悪いとはいえない」(32.1%)、「どんな理由があっても許してはいけない」(22.3%)「よくわからない」(24.1%)であった。いじめの形態としては、林の数量化Ⅲ類によって第Ⅰ群「心理的いじめ型(仲間はずれ・無視;等)」、第Ⅱ群「心理的ふざけ型(持物をかくす;無理やいやがることをする;等)」第Ⅲ群「物理的いじめ型(プロレスごっこで一方的になぐる;おどす;等)」、第Ⅳ群「物理的ふざけ型(きているものを脱がす等)」の4形態を見いだした。そして「現代のいじめは『いじめっ子』(加害者)、『いじめられっ子』(被害者)という関係だけで起こるわけではない。これらの直接の当事者を含めて、まわりでこれを『はやしたり面白がっている子』(観衆)と『見て見ぬふりをする子』(傍観者)という4層構造が密接にからまりあった学級集団全体のあり方の中で起こっている。…いわば教室全体が劇場であり、舞台と観客との反応によって進行する状況的ドラマである。」そして、学級のいじめには特に「観衆」が「積極的承認」、「傍観者」が「暗黙的支持」の働きをするこ

とを示唆している。このほかに小学校で僅かながら存在する仲裁者が中学校で一層減少することを指摘し、逃避的傾向の増大と関連していると考察している。さらに森田(1985)は「歯止め構造の消失」に着目し、「学級集団内での歯止め構造は、内在化された規範と集団的反作用力によるもので、…それが最近の学級には欠如している」と指摘する。

高木修(1986a)は、学級集団内でいじめが生起している強度(生徒の巻き込み、重大な影響)が強いほど、いじめ認知の割合が大きいと仮定して、いじめの認知率をひとつの指標として、いじめの実態をとらえ、それに関わる学級集団の特徴を明らかにしようとして、1985年、中学生402名(全学年)を対象に、1)「いじめ」の認知、タイプおよび「いじめ」との関わり方(役割)、2)「いじめ」に関する規範、3)教師のリーダーシップ、4)学級集団の特性、5)フェイス項目、からなる質問紙調査を実施した。いじめに関する規範はJackson, J.M. (1960, 1965)のリターン・ポテンシャル・モデルを援用した佐々木薫(1971, 1982)や阿久根求(1984)が参考にされているが、いじめを目撃した場合に生徒が取得する行動の型として①「やめろ」と言って注意し、いじめのことを先生に報告する②「やめろ」と言って注意するが、先生には報告しない③別に何もしていない(注意もせず、報告もしない)④もっとやれと言って、はやしたてる⑤一緒になっていじめる、の5種類を設定、いじめの場面で誰かがそれらの行動をとったら、人(クラスの人達;先生;自分自身)はどのように評価するかを問うた。教師のリーダーシップについては三隅二不二のPM論が援用された。そこで「教師が目標達成と集団維持の機能をはたしていると生徒が感じるクラスにおいてほど、また、生徒間に協力的・親和的關係や生徒相互の関心と配慮が存在すると思われ、また、「いじめ」に関して、望ましい行動を高く、望ましくない行動を低く評価する規範が共有されていると考えられていた。そして、そのような特徴を持つクラスにおいてほど、「いじめ」の認知が少なかった。」ことを見いだした。森田の「歯止めの消失」とも関わりが見え、示唆に富む。古市裕一ら(1989)も、中学生を対象に、森田の4層構造論を参考にして「被害者」「被害・加害者」「中心的加害者」「追従的加害者」「観衆」「仲裁者」「傍観者(なにもしなかった)」の7群に分類、さらに「傍観者」を、もしクラスでいじめが起こった時どうするかに対する回答でA群(いじめをとめる)、B群(やはり傍観の立場にいる)、C群(わからない)に分け、それら8群(加害者は2群一括)の特性を、「価値意識」「性格特性」「適応傾向」の面で比較している。「価値意識」は森田ら(1985)を参考にした16項目、「性格」はY-G性格検査を基調とした36項目、「適応」は父、母、級友、教師との適

応状態、学校ざらい傾向の5側面30項目である。数量化Ⅲ類による分析で「価値意識」では、「社会的規範尊重、自己表現積極的」の象限に仲裁者が、「規範は尊重し自己表現は少ない」の位置に傍観者Aが、「社会的規範軽視、自己表現中程度」の位置に加害者が、また、「規範軽視の傾向があり、やや事なかれ主義」の位置に観衆、傍観者C、被害・加害者、傍観者Bが、「社会的規範尊重でやや事なかれ主義」の位置に被害者が位置づけられた。ここで古市は、いじめの加害者や観衆に対する指導にはいじめは許されない行為と認識させることとあわせて「社会的規範を尊重する態度を養うという、より基本的な働きかけ」が必要であると説く。また、性格では被害者群は内向的・劣等感大、被害・加害者群と加害者群は攻撃的・非協調的・劣等感大、観衆群は攻撃的、仲裁者群は外向的・協調的、傍観者A群は非攻撃的・協調的・劣等感小、傍観者B群は特徴なし、傍観者C群は非攻撃的との結果を得た。古市らは、「被害・加害者群」について「(この群の)性格や適応傾向は、被害者群と加害者群の抱える問題をとともに備えたようなパターン(被害者群の特徴である劣等感の強さ、級友不適応と、加害者群の特徴である攻撃性の強さ、非協調性、教師不適応)を示していることに注目したい。」と述べ、この群をOlweus(1978)のprovocative whipping-boy(古市は挑発的いじめられっ子という)に該当するもので指導に特別の配慮を必要とすると論ずる。

井上健治ら(1986)も「いじめは当事者だけの問題ではない。当事者だけが他と分離して存在するのではない。…学級の他の成員の存在を無視できない…とすれば、いじめを考えるには、当事者だけでなく、いじめをめぐるさまざまな役割をとる人物に焦点をあてる必要がある。」として、いじめにおける役割を小学5年生508名、中学2年生499名を対象に、いじめの事実関係(いじめの形態別生起頻度、生起理由、いじめ生起時の自分の役割)、いじめ、道徳等に対する態度(反社会的行為への態度、いじめの理由に対する許容度等)、友人関係の認知、学校生活の楽しさと満足度、学業成績の自己評価(算数と体育)を主項目とする質問紙調査を実施、いじめにおける役割を「被害者」「加害者(中心、加担いづれをも含む)」「観衆」「同情者」「制止者」「通報者」「傍観者」の7種類とした。いじめの形態は「暴力、衣服、強奪、脅迫、強要、かくす、なぶる、仲間外れ、無視、その他」からの複数選択で、小学女子の仲間外れ(84%)を最高にかなりの認知率が報告されている。またいじめの理由は「こらしめ」「異質者排除」「不条理(いじめるのが面白い、運動がへた等)」「その他(むしゃくしゃ、体つき等)」が抽出され、「こらしめ」のいじめが多く挙げられ、かつ許容度も高い。役割では「同情」「傍観」が小・中学生ともに多く、「制止」は男子が小学生17%、中学生

13%に比べ、女子はそれぞれ2%, 4%と極めて少ない。しかし、森田、古市らのデータと比べ、男子の制止の出現率は高い方であると言えよう。

また、竹村和久、高木修(1988)は、異質性がいじめにどのように関わるかを、「仲間集団内での異質性として、種々の同調行動からの逸脱をとりあげ、異質者に対する態度や同調形成と“いじめ”との関連を検討する」ことを目指して、中学生を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は種々の状況での同調行動からの逸脱を記述するため、状況の性質(向・反・中性的—社会的行動)×物語の主人公の非同調行動の型(行為的・無為的)×教師の関連の有無(2水準)の計12個の物語を構成、各場面での主人公の逸脱行為についての評定、自分自身のその場での逸脱行動の生起予想などを回答させるものである。その結果、向・反社会的場面での同調傾向が“いじめ”の現象と関連性を有していた。すなわち、これらの場面では加害者の同調傾性が被害者のそれと比べて有意に高いことが見いだされた。また、行動レベルにおいては、加害者と仲裁者は対立するが、逸脱者に対する態度においては、加害者と仲裁者には親近性があることが示唆された。「これは仲裁者が必ずしも被害者に深く共感して援助をしているのではないことを暗示している。“いじめ”に対する対策を考える場合、このような現実を把握しておく必要がある」と竹村らは言う。

松村茂治・高柳良太(1991, 1992)は、「ある公立小学校の学級を、そこで生じた対人的な問題を絡めながら、2年間にわたって追うことを通して、学級担任の教師が子どもたちの社会性を育み、適応上の問題に対する理解と指導を試みていく際の主要な介入の場としての学級集団のあり方について」ソシオメトリック・テストを5回実施し、縦断的に検討を加えた。たまたまいじめ事件に遭遇し、「『いじめ』と暴行事件に対する取り組みが、このクラスの集団としての動向に大きな影響をもったと思われる。この2つの事件を機に、腕力に物を言わせてきた集団がその影響力を弱め、男子の集団は大きく変わっていった。」と述べ、現実の学級の生きた動きの把握の好例を提供した。

5. いじめの心理的背景

深谷和子(1986a, b)は、「いじめ」の概念や意味が現在(昭和61年当時)人々の間にまだ種々の混乱や不一致があると指摘し(深谷自身「いじめ」と括弧をつけて論ずる)、自身の研究から①「いじめ」の多くは、一人に対して集団が加える攻撃②「いじめ」はケンカと違って持続時間が長い③ケンカの多くが「理由をもった攻撃」(相手に損失を与えたり危害を加えたため、相手から攻撃される)であるのに対し

て「いじめ」の多くは「理由のない攻撃」である④ケンカは利害の衝突によって始められるので、攻撃をしかけやすいタイプ(ケンカ好きなタイプ)はあっても「攻撃され易いタイプ」があるわけではない。しかし「いじめ」には対象となり易い人格特徴があるとされ、「弱さ」をベースに「生意気、目障り、ムカつく」などの集団の中で周囲に何らかの異質性、違和感を感じさせる人格の持ち主が的にされ易い⑤「いじめ」の一般的な方法としては「からかう、悪口を言う、いじわるする、いたずらする、いやがらせをする」がどの年齢でも多い⑥「いじめ」は集団の外部にもれにくい、を挙げ、そのような「いじめ」の正体として①「いじめ」は子どもたちにとっての面白ゲームである②「いじめ」の拡がり、子どもたちの対人知覚や対人関係に異常が起こっていることの表われである③「いじめ」の中には、ギャング・エイジに見いだされるような発達上の特色からくるメンタリティがひそんでいる、としている。そして、「日本社会が子どもたちの健全育成に失敗した部分とは、①発達の節目に沿った健康な攻撃性の発揮や成長のための羽ばたきの場を子どもに用意していない、②特に幼少期に多様な人間関係の中で成長する機会を与えられていないので、他人と自分をつなぐパイプが細くこわれ易くなっていて、その部分から種々の不適応行動が出現する、③子ども自身の中に十分な人権意識(他人の人権を尊重することもむろんだが、それ以上に自分の手で自分の人権を護ろうとする構え)が育っていない、などに集約されるのではなからうか。」と推論する。

鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄(1986)は共同研究を実施、いじめ経験の有無、いじめの概念、対象、いじめる時の仲間、場所、時、いじめた時の気持ち、いじめられた時の気持ち、いじめられている人の気持ち、いじめの理由、いじめの許容度、両親の感知度、両親の対応、両親の許容度、先生の感知度、先生の対応、先生の許容度、いじめをなくす方法、など、26項目に亘って小学5、6年生、中学全学年に広範に尋ねたところをもとに鈴木と吉田が分析を担当、考察を加えた。そこでは、様々な知見が得られたが、いじめたときの気持ちが小学男女、中学男ともにトップに「おもしろい」、中学女子のみ「いやな気持ち」が一位であるのに反して、その同じ子どもたちがいじめられている人の気持ちの推測では「いやな気持ち」を小学・中学男女とも一位に挙げているところが特に目についた。また佐藤は大学生に対しての回想形式によるいじめの多側面にわたる調査を担当、いじめの発生は多くは(103事例中82事例)学級の中であったという結果等を得ている。篠原はいじめの集団構造を新聞報道や調査に基づいて、①集団斉一性型(出る杭うち型、異端型、規範同調型等)②リーダーによる支配権確認型(体制

迎合リーダー型、ボス型、支配交代型等) ③ペッキング・オーダー型および報復爆発型(スポーツ集団リンチ型、恐喝型等) ④個人の欲求充足、緊張解消型(妬み、嫉みによるいじめ、うっぶんばらし等) に分類した。

長根光男(1988, 1991)は学校生活における小学校児童の心理的ストレスの分析を行うため、因子分析により4因子20項目の尺度を構成し、児童239名にそれを実施した。第1因子は「友達が目の前で内緒話を始めた時」「仲の良い友達から仲間はずれにされた時」「友達にからかわれた時、悪口を言われた時」「友達に気にしていることを言われた時」「友達から言いたくないことをわざと聞かれた時」「友達に無視された時」の6項目で友達に関する因子と命名された。その他「授業中の発表」「学業成績」「失敗」に関する因子が抽出された。そして友達関係のストレスが極めて大きく小学生達の学校生活にかかわっていることを見いだしている。「総務庁(1988)によると、昭和62年度間にいじめが発生した小学校は4,497校で、全小学校の18.2%の学校で発生したと報告されている。これに示されるような人間関係の難しさが本研究においても示唆された。・・・本研究で抽出された因子も、わが国の教育的風土(文部省1989)としてのいじめや受験競争とも関連している・・・」と論ずる。

6. いじめっ子—いじめられっ子、観衆、傍観者

古市裕一ら(1986)は、深谷和子・中原美恵(1984)やOlweus(1978)などの研究をふまえながら、小・中学校におけるいじめ・いじめられの実態、いじめっ子・いじめられっ子の心理的特徴を明らかにしようとした。いじめ・いじめられ経験は36種のいじめの具体項目、心理的特性はY-G検査からの抽出項目と自尊感情、適応傾向は6種36項目で調査、「いじめっ子」「いじめ・いじめられっ子」「いじめられっ子」「局外児」を抽出、男子群において、局外児群は他に比べ、性格面では積極的、情緒安定的な傾向が強く、自尊心も高い。ところが、いじめっ子群も局外児群と類似の傾向を示した。しかし欲求不満耐性が局外児群に比べて有意に低い。それに対しいじめられっ子群は、非協調的で情緒不安定、自尊感情が低く、不適応傾向も強い。いじめ・いじめられっ子群はそれらに加えて、性格的に衝動的、攻撃的、内向的といった傾向も見られる。女子群もほぼ類似の傾向が示された。杉原一昭ら(1986)も「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位とパーソナリティ特性の比較を行っている。即ち小学5、6年生245名を対象に質問紙調査を実施、いじめっ子は「明るく活発で、外向的であり、学級内では目立つ存在である。そして、強靱な面をもっている反面、耐性・誠実さに欠け落ち着きがない」、いじめられっ子は

「内向的で、学級内でも消極的で目立たない存在であり、依存性が強く非常に神経質な面をもっている」との結論を述べている。

富士原光洋・松井豊(1986)は学校生活における「いじめ」を間宮を代表とする「児童・生徒のいじめの問題に関する総合的研究」の1部として、全国の小学生と母2,413組、中学生と母2,450組、高校生と母1,350組、小・中・高校教師各285名、288名、296名を対象に郵送形式の質問紙調査を実施、いじめのクラス構造として「被害者」「積極的加害者」「追従的加害者」「観衆」「仲裁者」「傍観者」の6層構造とみなした。中学生に関して「被害者」は孤独感、自己疎外感が強く、対人恐怖傾向高く、「積極的加害者」はわがまま、攻撃的、イライラする、クラスのリーダー的性格が挙げられ、「追従的加害者」もイライラ、短気のほか「両加害者」とも教師への反抗的姿勢が強い。「仲裁者」はイライラの少ない情緒安定傾向が示された。

小島賢一(1988, 1992)は少年鑑別所に収容された非行少年にみられるいじめについて、初発非行発生と「いじめ、いじめられ」行為との時期に着目、「いじめ先行型、関連型、後発型」に3分類し、いじめ理由、実行行為などを検討、いじめられの方がいじめより多いこと、「同じいじめでも非行発生と関連してくるに従って少数のいじめから集団での遊び的で反社会性の強いものに変化している」ことを見いだした。

高木修(1986)は「なぜ傍観者でいるのか」について社会心理学で用いる行動の説明原理①規範からの説明②行動にともなう出費と報酬からの説明③気分や感情からの説明の観点や、行動に及ぼす他者の影響に関しての「見物人効果」「傍観者効果」「扇動者効果」の視点や、規範的意思決定モデルの観点から、傍観者の出現過程やその特質などを吟味推論し、①思いやり、共感能力の未熟や欠如、②社会的行動様式の貧困さ、③行動能力の貧困さ、④道徳的価値観の未確立、⑤社会規範意識の低さ、⑥利己的な出費・報酬計算の傾向、⑦安易な自己防衛的回避の傾向、⑧責任の否認傾向、などがいじめ事態の傍観者にあてはまると論じている。

長谷川啓之ら(1994)はいじめっ子いじめられっ子を写真判断により見分ける課題を大学生に与え、外見的なステレオタイプがあることを見いだした。

松田伯彦ら(1992, 1993)はいじめを欲求不満、欲求不満耐性の観点から小学生・中学生を対象に①規範意識、欲求、欲求不満、欲求不満耐性、②いじめ体験にかかわる事項、についての質問紙調査を実施、いじめも欲求不満耐性の低下からくる攻撃性であろうと推論する。さらに松田(1993)は高校生についても同様の傾向を得た。

深谷昌志 (1986) は「フラストレーションがないような学校が作られたとしても、『いじめ』がなくなることには直接つながらない」という深谷和子の意見に対して「今の話で難しいのは、われわれ大人たちは一応自分たちなりの体験から、この程度子どもをフラストレイトさせたらこの程度攻撃的になるという図式を持っているわけです。おそらく先生方だってそうでしょう。ところが最近の子どもたちは、大人たちから言ったらフラストレイトしていると思えない状況の中で、つまり低いフラストレーションのレベルで子どもたちの反応が始まってしまう…」として、いわゆる「古典的いじめ(子ども社会で存在してきた弱い者いじめをして楽しむ)」「迫害的いじめ(管理化された社会での権力者が下位の立場の者に攻撃をかける: 昔の軍隊でのいじめの様な)」の状況で、鍛えられて人間として成長していくという図式が、現代の「いじめ」には簡単にあてはまらないことを指摘している。

7. いじめに対する態度と価値観、生活態度とのかかわり

鈴木康平は1985年東京大学での日本社会心理学会シンポジウム、古畑和孝司会「現今の教育問題と社会心理学よりの提言」の中で、熊本シンポジウムをふまえて、新たにいじめ発生の機序と対策を論じた(1986a, 1987)。更に鈴木 (1989a) は小学生354名・中学生696名を対象に児童生徒たちのいじめに対する認識を、いじめの原因、いじめられの原因、いじめの対策、いじめ根絶の可能・不可能の程度、いじめに関わる許容度をいじめの9個の意見への5段階尺度による応答で求めた。いじめ根絶視の程度は「いじめは人間のいるところにはかならずあり、決してありません」の項目への5段階評定の応答で分類した。即ち、この項目に対して「大いに賛成」「まあ賛成」を根絶不可能視群 (IMP 群), 「どちらともいえない」を中間群 (MD 群), 「大いに反対」「まあ反対」を根絶可能視群 (PO 群) とみなした。それぞれの出現率は小学生で IMP 群30.23%, MD 群37.01%, PO 群32.77%, 中学生で IMP 群31.75%, MD 群38.22%, PO 群30.02%であり、その該当割合が3群間で類似していることに注目したい。いじめについての意見9項目(概要)は、いじめは①人間として情けない②しかたがない③わけがあれば許される④人間の自然なおこない⑤人間として最低の行為⑥いじめにもよいところがある⑦必要悪⑧どんなことがあっても許されない⑨やむをえない、である。これらについての応答は、PO 群が⑤を除いて全て有意に強く厳しい方への偏りを示している。その傾向は①を除き、全ての項目で、PO 群>MD 群>IMP 群となっている。更に鈴木 (1989b) は、教育学部2年次生 (103名)、教育実習生 (113

名)、現職教師 (82名) のいじめに対する認識を調査した。上述の鈴木(1989a)の研究と同一のいじめに対する意見項目を用いているが、その出現率は全対象で IMP 群111名 (37.25%), MD 群100名 (33.55%), PO 群87名 (29.19%) で小・中学生のそれらと類似の傾向を示している。9個の意見についての応答傾向も小・中学生のそれと類似しており、①③⑤の項目に3群間の有意差は見いだされなかったが、他はすべて PO 群>MD 群>IMP 群の順に厳しい評定をくだしていた。鈴木 (1990) はさらにいじめに対する態度と価値観の関係について小・中学生を対象にして調査をしている。鈴木・田口・田口 (1991) は、更に対象を広げて小・中・大学生、現職教師に対して、日常生活のあり方、人間観 (性善説・性悪説)、Spranger, E. の生活の6類型、続有恒ら (1959) の「幸福にとっての必須要因」などといじめに対する態度との関わりを探った。PO 群は性善説、IMP 群は性悪説に賛同の傾向が見いだされた。ついで鈴木ら (1992, 1993) はいじめ発生のある学級の雰囲気といじめに関わりを持った当事者の特性の認知の違いを研究、さらに鈴木ら (1994) は、いじめの場の集団特性といじめられる子のサポーターの存在の認識とその意義についての検討を始めた。

8. いじめに対する指導・対策

ここは当然のことながらいじめの原因の認識と直結する。例えば、飽田典子ら (1987) は、自主シンポ「今、改めて『いじめ』を考える」で、昭和59年度から3年間都内の小・中学校を対象に「いじめ—いじめられの心理と構造に関する基礎的研究」を行ったところを基に、①いじめ発生、消滅と学級集団の形成との関わり②いじめの発生、解決と教師との関わり③相談機関として何が出来るか、等について加室弘子・多賀谷篤子・藤原秀樹・坪内宏介とともに考察、また古畑 (1986) は、いじめられっ子にも問題ありとしてアプローチすることは問題を解決しない、いじめは現今の教育体制への反乱であるとそれを正当化し、いじめられている子を放置する様な姿勢からでは、いじめはなくならないうと述べる。中村陽吉 (1986) は「いじめ」への長期的対策を訴える。彼は「いじめ」を社会的病理現象と捉え、他者をいじめる快感、他者の苦しみが行為者の快感になっていることの異常さが成人社会にも中学校にも見られると指摘、それを打破するためには単なる対症療法だけでなく、価値観の形成期にある児童期に他者を思いやることの大切さ、他者の心の痛みへの理解を己れの価値観として定着させる親の側の努力が必要で、そのような長期的・予防的な対策が必要であろうと強調する。鈴木 (1986a, b, 1987) も長期・中期的対策とその場での指導を提言した。それらを

以下にまとめる。長期的には人間の奢り(宇宙の中で最も優れた知的存在と自惚れ始めている)を大人が反省し、宇宙・自然に対する謙虚な畏敬の念を次世代に対して、より強く醸成、生命の尊厳の真の教育の実施、人間観・教育観の再検討(子どもに対してだけではない)、中期的には学級が成員一人ひとりにとって準拠集団となるような学級経営の努力、直接の指導としては、教師集団の一枚岩(いじめの実態を自由に報告・考え合うことのできる職員室)、いじめられた者の痛みをいじめた者に認識させる指導、親としてのかわり、いじめられる者のサポートの重要性の認識と正当な自己主張の勇気を抱く教育、地域社会の子どもへの無関心の反省等である。

ここでイギリスの例を挙げる。Smith と Thompson は 1991 年 “Practical approaches to bullying” を、Elliott も同年 “Bullying: A practical guide to coping for schools” を著している。Smith と Sharp 等はその著の中でいじめの起こる背景と、学校ぐるみでいじめの解消に取り組んだプロジェクトを紹介している。The DEF Sheffield Anti-Bullying Project と称する 24 校での実践研究で 1991—1993 年 8 月までの実績を詳しく報告し、学校でのいじめは工夫と努力で減少すると結論づけている。プロジェクト・チーム、学校全教師、子ども、家庭それぞれにかかわる綿密な計画のもとで実施された。それを紹介するゆとりはないが、そのうち 1, 2 を示せば、いじめの測定は具体的な攻撃行動 6 項目への応答を基準に算出、いじめられた子への指導の一つに正当な自己主張の出来る技能の体得、クラスでのドラマやディスカッション、昼食時や校庭での指導等、きめ細かなストラテジーが組まれている。これらはスカンジナビアでの Olweus らの参画になる国家規模のプロジェクトが参考にされている。

9. 学校でのいじめの研究—これからの展開

学校でのいじめの問題は実践科学としての教育心理学が避けて通れない道である。

この領域での研究の目的は、まず、現実の教育の場で深刻ないじめによる犠牲者を出さないような知見の発見である。そのため、現職の教師と一体となって今現にある学級の集団構造の解明、いじめにかかわる顕在的・潜在的要因の把握、さらには現に今いじめている子ども(達)の発見の方法、今いじめられて悩んでいる子どもの存在の察知の方法とそれへの援助の技法の開発などの即時的な問題へのアクション・リサーチ的な研究をする必要がある。

一方、人間行動の解明の一環として「いじめをする心理」機制(いじめをしなければ、いじめられない)の徹底的な

究明—旧来からのいじめと昨今の深刻ないじめとの境界が曖昧である現実が大きな問題をはらんでいる—が、目前のいじめ事象の低減を目指す研究と並行してなされることが必要である。人間存在の根幹に触れる重要な研究である。ここでは、いじめと人間存在の意義にまで考察を巡らせる長期的な展望を視野に入れた研究が、或いはいじめと人間集団の特質に深く関わる研究が、さらには、いじめと教育観・人間観・人生観との関わりの研究が地道になされていくことが期待される。

筆者自身いじめ研究に携わりながら常にその究明の困難さを痛感してきた。引用させていただいた諸氏の研究の真意を十分くみ取らず誤解しているところもあるのではないかと懸念する。さらに、手許にありながら紙数の関係で触れられなかった文献も相当な数にのぼる。研究者の各位から多くの貴重な示唆をいただいたことに感謝の意を表わす。

深刻ないじめにより若い命を絶つ子どもが今後皆無であることを念じ、既にあの世に旅立った幾人もの若い魂のご冥福を祈りながら擱筆する。

引用文献

- 阿久根求 1984 学校規範に関する研究 教心26回総会論文集, 524-525.
- 飽田典子・加室弘子・多賀谷篤子・藤原秀樹・坪内宏介 1987 今、改めて「いじめ」を考える 教心29回総会論文集, S50-S51.
- Elliott, M. (Ed.) 1991 *Bullying: A practical guide to coping for schools*. Harlow: Longman.
- 遠藤辰雄 1985 「いじめ」をめぐる非行 教育と医学, 33, 69-75.
- 富士原光洋・松井 豊 1986 学校教育における「いじめ」の研究 教心28回総会論文集, 980-981.
- 深谷和子・中原美恵 1984 モノグラフ・小学生ナウ 4 (2) 福武書店
- 深谷和子 1986a 「いじめ」—ギャング・エイジの異形の姿— 現代のエスプリ, No228, 5-18.
- 深谷和子 1986b 調査レポート・II—中学生の「いじめ」— 現代のエスプリ, No228, 44-56.
- 深谷和子 1986c 「いじめ」の流行の意味したもの 日心50回総会論文集, S39.
- 深谷和子・中原美恵 1986 調査レポート・I —小学生の「いじめ」— 現代のエスプリ, No228, 34-43.
- 深谷昌志 1986 座談会 これからの学校のあり方—学校の再生をもとめて— 深谷和子司会・中野光・深谷昌志座談 現代のエスプリ, No228, 145-162.
- 古畑和孝 1985 なぜ「いじめ」が起こるのか「いじめ」

- の構造を探索 学習指導研修, 8(2), 42-48.
- 古畑和孝 1986 「いじめ」問題再考 学習指導研修, 8(1), 45-48.
- 古市裕一・岡村公恵・起塚孝子・久戸瀬敦子 1986 小・中学校における「いじめ」問題の実態といじめっ子の心理的特徴 岡山大学教育学部研究集録, 71, 175-194.
- 古市裕一・余公俊晴・前田典子 1989 いじめにかかわる子どもたちの心理的特徴 岡山大学教育学部研究集録, 81, 121-128.
- 蜂屋良彦 1986 「いじめ」深刻化の社会的要因は何か 学習指導研修, 8(1), 52-55.
- 長谷川啓之・斎藤由希子・大野俊和 1994 外見でいじめられっ子がわかるか? —いじめられっ子のステレオタイプ研究— 社心35回大会論文集, 456-457.
- 井上健治・戸田有一・中松雅利 1986 いじめにおける役割 東京大学教育学部紀要, 26, 89-106.
- 河井芳文・中村享史・神原尚之・多羅沢守・青山裕子・保坂 操・保坂早苗・田中克昌 1985 児童におけるソシオメトリの選択, および排斥の理由とその分類 東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学, 36, 49-58.
- 小林 剛 1985 いじめを克服する —教師への期待— 有斐閣
- 小島賢一 1988 非行少年に見られる「いじめ」についてIV 教心30回総会論文集, 256.
- 小島賢一 1992 非行少年に見られる「いじめ」についてVIII 教心34回総会論文集, 544-545.
- Lowenstein, L.F. 1978a Who is the bully? *Bulletin of the British Psychological Society*, 31, 147-149.
- Lowenstein, L.F. 1978b The bullied and non-bullied child. *Bulletin of the British Psychological Society*, 31, 316-318.
- 毎日新聞社教育取材班 1983 “いじめ”の構造 株式会社創文
- 松田伯彦・佐藤裕子・福家弘康・行本美香・片山美智代 1992 いじめに関する教育心理学的研究 教心34回総会論文集, 190-191.
- 松田伯彦 1993 いじめに関する教育心理学的研究 —特に高校生の場合— 日心57回大会論文集, 598.
- 松田伯彦・佐藤裕子・福家弘康・行本美香・片山美智代 1993 いじめに関する教育心理学的研究 —特に中学生の場合— 教心35回総会論文集, 339.
- 松本良夫 1986 「いじめ」の社会学的考察 現代のエスプリ, No228, 78-87.
- 松村茂治 1990 ある学級担任の教師による「いじめ」への対応 教心32回総会論文集, 147.
- 松村茂治・高柳良太 1991 「いじめ」事件のその後と学級の集団構造の変化 教心33回総会論文集, 537-538.
- 松村茂治・高柳良太 1992 ソシオメトリックテストによるある学級集団構造の2年間の追跡研究 東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学, 43, 105-122.
- 宮原広司 1983 いじめの構造と実践の課題 生活指導, No319, 5-8.
- 文部省 1966 文部省生徒指導資料 第2集 生徒指導の実践上の諸問題とその解明 大蔵省印刷局
- 文部省 1982 文部省生徒指導資料 第17集 生徒の健全育成をめぐる諸問題 —校内暴力問題を中心に— 大蔵省印刷局
- 文部省 1984 小学校生徒指導資料3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題 大蔵省印刷局
- 文部省初等中等教育局中学校課 1991 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局
- 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, No836, 29-35.
- 森田洋司 1986a いじめの四層構造論 現代のエスプリ, No228, 57-67.
- 森田洋司 1986b 「いじめ」の現状とその克服のために 児童心理, 40(12), 8-17.
- 森田洋司・清永賢二 1986 いじめ —教室の病い— 金子書房
- 森田洋司 1987 「いじめ」問題へのコントロール論的アプローチの可能性 原野広太郎他(編) 児童心理学の進歩—1987年版— 金子書房
- 森田洋司・清永賢二 1994 新訂版 いじめ —教室の病い— 金子書房
- 中村陽吉 1986 「いじめ」の長期的対策を 学習指導研修, 8(1), 56-58.
- 長根光男 1988 児童による学級担任の雰囲気認知と学力・社会的地位・ストレス度との関連性 教心30回総会論文集, 588-589.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして— 教育心理学研究, 39, 182-185.
- 野崎幸雄 1985 座談会 いじめと現代社会 松尾浩也司会・徳重篤史・松本良夫・村瀬嘉代子座談 ジュリスト, No836, 6-21.
- 小川一夫 1956a 学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究 —第一報告— 教育心理学研究, 3, 228-235.
- 小川一夫 1956b 学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究 —第二報告— 教育心理学研究, 4, 46-54.

- Olweus, D. 1978 *Aggression in the schools : Bullies and whipping boys*. Washington, D.C : Hemisphere.
- Olweus, D. 1984 *Aggressors and their victims : Bullying at school*. In N. Frude & H. Gault (eds.), *Disruptive behaviour in schools*. New York : Wiley, 57-76.
- Olweus, D. 1993 *Bullying at school : What we know and what we can do*. Oxford, Blackwell.
- 佐々木薫 1971 規範形成におよぼす制裁の効果に関する調査研究 —カンニング事件による自然実験— 関西学院大学社会学部紀要, 23, 79-90.
- 佐々木薫 1982 集団規範の変化に関する研究 三隅二不二・木下富雄(編)「現代社会心理学の発展 I」ナカニシヤ出版, 151-182.
- Sharp, S., & Smith, P.K. (Eds.) 1994 *Tackling bullying in your school*. London : Routledge.
- 市来恵子 「いじめ」の日米比較 教育と医学, 33, 63-68.
- Smith, P.K., & Thompson, D. (Ed.) 1991 *Practical approaches to bullying*. London: David Fulton.
- Smith, P.K., & Sharp, S. (Eds.) 1994 *School bullying*. London: Routledge.
- 杉原一昭・宮田 敬・桜井茂男 1986 「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位とパーソナリティ特性の比較 筑波大学心理学研究, 8, 63-72.
- 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育学部附属教育学センター紀要, 3, 97-115.
- 鈴木康平 1986a 「いじめ」の背景・動機・対策 学習指導研修, 8(1), 34-39.
- 鈴木康平 1986b いじめの心理 —原因・動機と指導— 日心50回大会論文集, S38.
- 鈴木康平 1987 現代社会といじめ再考 教育心理(日本文化科学社), 35(10), 6-11.
- 鈴木康平 1989a いじめに対する小・中学生の認識 熊本大学教育実践研究, 6, 61-81.
- 鈴木康平 1989b いじめに対する教育学部2年次生・教育実習生・現職教師の認識 熊本大学教育学部紀要, 38, 257-270.
- 鈴木康平 1990 いじめに対する態度と価値観 —とくに小・中学生の場合— 熊本大学教育学部紀要, 39, 285-302.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1990 いじめに対する意見と原因の認識 熊本大学教育学部紀要, 39, 303-317.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1991 いじめに対する態度と生活意識・価値観 熊本大学教育学部紀要, 8, 79-86.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992 いじめに対する認識の発達社会心理学的研究 —いじめ根絶視と「いじめ—いじめられ」の当事者に対する認識の観点から— 熊本大学教育学部紀要, 41, 213-226.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1993 「いじめ—いじめられ」の場の認知 —いじめへの態度と「いじめ—いじめられ」の場における学級の雰囲気と当事者の特性の認知— 熊本大学教育学部紀要, 42, 229-245.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1994 いじめにかかわる集団の特性の認知 グル・ダイ42回大会論文集, 90-91.
- 高木 修 1986a いじめを規定する学級集団の特徴 関西大学社会学部紀要, 18(1), 1-30.
- 高木 修 1986b なぜ傍観者でいるか 現代のエスプリ, No228, 114-125.
- 竹村和久・高木 修 1988 “いじめ”現象に関わる心理的要因 —逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾向— 教育心理学研究, 36, 57-62.
- 詫摩武俊 1984 こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる 山手書房
- 詫摩武俊 1986 いじめ—いじめられの諸問題 日心50回大会論文集, S37.
- 田中熊次郎 1955 学級社会における「社会的共感性」の発達と変容 —教育心理学におけるソシオメトリー発展の方向— 教育心理学研究, 3, 133-145.
- 徳重篤史・野崎幸雄・松尾浩也・松本良夫・村瀬嘉代子 1985 いじめと現代社会 ジュリスト, No836, 6-22.
- 富田武忠(編) 1980 いじめられっ子 講談社
- 牛島義友 1950 社会性の発達 依田新(編) 教育心理学 金子書房
- 依田 新・大橋正夫・島田四郎 1954 学級構造の研究 —入学時より三年間の友人関係の調査— 教育心理学研究, 2, 1-9.